

長崎大学  
インフラ長寿命化センター  
特任研究員  
**小島健一**  
Kenichi Kojima



# 見学から始まった土木との縁えにし

現在、私は「長崎大学インフラ長寿命化センター」にて研究員として働いている。いわばどっぷり土木に浸かっており、今日も現場の方々とB・B・Qなどして親交を深めてきたのだが、十年ほど前は、土木のことなどこれっぽっちも「眼中に無かった」。本稿ではこの十年で私に何があつたのか、部外者から見て「土木がどう見えているのか」などを書きたいと思う。

## パラダイムシフト序章

二〇〇四年四月二十三日。私は、東京虎ノ門の地下四〇層にある日比谷共同溝にいた。「東京ジオサイトプロジェクト2 沈黙のシールドマシン展」と銘打たれた地底現場見学会に参加

していたのだ。このイベントは従来の土木見学会と異なり、「工事現場はカッコいい」というメッセージを全面に出しPRしていた。綺麗な写真に綺麗なホームページ、そして「見たこともないものを目撃できるかもしれない」という期待感を煽るキャッチコピー。私はままとそれらに釣られ、一時間の行列も気にせず見学会に参加することにした。それまでの私は「土木工事の現場」に来たことはなかったし、さらに言うなら「土木」が何を指す言葉なのかも曖昧にしか認識していなかった。

しかし、「東京ジオサイトプロジェクト」に参加し、地底の現場から地上に出た頃には「土木」に対する認識がすっかり変わってしまった。共

同溝は未知の世界で確かにカッコ良かった。しかし、それ以上にカッコ良かったのが、その現場を創り上げている職人さんたちの誇りに満ちた姿だった。そう、私が意識していなかった「土木」はみんな「人の手」によって創りだされていたのだ。そして、その「土木」を基盤に街が創られ、人々が生活していた。私はその時まで、それを強く意識することは無かった。地上に出た時、自分が「無意識だった土木」に囲まれていることを意識した瞬間は、まるで天と地がひっくり返ったかのように衝撃的だった。

## 社会科見学に行こう！の立ち上げ

土木現場見学に衝撃を受けた私は「どうすれ

ばまた現場を見学できるのか」を思索し、その結果「現場見学は人が集まると開催されることがある」と知った。そこで当時流行っていたWEBサービスで見学団体「社会科見学に行こう！」を作り、人を集めることにしたのだ。土木現場に衝撃を受けた私は、その他の業種の現場も見てみたくなり、食品工場や発電所、研究所なども見学した。WEBサイト制作や写真撮影の仕事のかたわら社会科見学を行い、ブログやホームページで見学のレポートを発信していたところ、グループ立ち上げから一年ほどでグループ登録者は一、〇〇〇人を超え、「大人の社会科見学が流行っている」として新聞やテレビなどで取り上げられる機会が増えた。当初の目的であった日比谷共同溝の方とも知り合い、何度も現場見学をした。また、その頃には「社会科見学」関連の仕事や、土木雑誌からの記事依頼なども来るようになった。そして、二〇〇七年には著書『社会科見学に行こう！』や『ニッポン地下観光ガイド』なども出版するようになったのだ。そうこうするうちにいつしか私の本業が「社会科見学」になっていった。

## 迎えられる側から迎える側へ (離島への移住)

二〇一〇年春、友人と話していて地域おこし

に関心を持つようになった。そして、「社会科見学」をベースにした地域おこしビジネスを立ち上げられないか模索するため、同年十月より半年間ビジネススクールに通うことにした。しかし、学校に通い六カ月目の二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起きてしまった。それにより関東は社会科見学どころではなくなってしまった。では何をしよう？ と考えた時、改めてやりたいと思ったのが「地域おこし」である。自分がそれまでやってきたこと、学校で学んだことを最大限活かすには「地域で社会科見学」系事業を行う地域に入り込むことであると考え、同年十月、長崎市の地域おこし協力隊員として九州で最後まで採炭をしていた炭鉱の島「池島」に移住した。

池島では廃炭鉱を利用した観光事業を行っており、以前自分が取材した際に島のポテンシャルの高さに驚いたのと、PRのまずさを感じていたからだ。今まで社会科見学でいろいろな方々に迎え入れてもらった自分が島に入り、今度は外の人を迎えることで、これまでと違う流れを作ることができると思ったのだ。

池島での詳しい活動はスペースの都合上割愛するが、島の魅力をインターネットで発信することで、任期の三年間で来島者を十倍以上に増やし、全国区の取材を何件も受ける島にするこ

とができた。

## そしてインフラ長寿命化センターへ

協力隊員の任期中に痛感したのは、池島は近年まで石炭を掘っていたため産業遺産として非常に状態が良いにも関わらず、そのまま放置され朽ちるのを待っているという残念さだった。産業遺産の保存となるとさすがに個人ではどうにもできない。

そんな時に今のセンターから誘いを受けた。このセンターは文字通りインフラの長寿命化を研究している機関で、構造物の劣化を調べる過程で世界遺産候補である「軍艦島」を丸ごと三次元映像化している。この技術を使えば朽ちゆく池島の記録を残すチャンスかも知れないと感じた。また、それまで「インフラの寿命」など考えたこともなかったが、インフラという莫大なものかとロマンを感じ話を受けることにした。この壮大さ、面白さを多くの人々に伝えたい。

紆余曲折ありながら、私がこうして土木の人間になったのも、元を辿れば日比谷共同溝で解説してくださったカッコいい職人さんたちがいたからだ。私もどこかの誰かに「土木ってカッコいいんだぜ！」と思って貰えるよう、気を引き締めて仕事をしたいと思う。